

第16分科会

芸術（音楽）領域における知的障がい者の
職業リハビリテーションに関する実践報告

佐々木 浩則

株式会社ヤマハアイワークス 専任ジョブコーチ

【連絡先】 e-mail: hironori.sasaki@music.yamaha.com

【演奏映像】 <http://www.youtube.com/@yupa2025>

1. はじめに

- ・本報告は、知的障がいのある個人の音楽活動が、いかにして『天職』へと育まれたか、その具体的プロセスを年代ごとに振り返るものである。
- ・本人の主体性と父親の伴走支援が相乗効果を生み、共働・共生へと昇華した結果、ピアノ即興演奏は本人にとって「生きることそのもの」となり、「自分のピアノカフェを持つ」夢を実現した。
- ・この実践を通じて、音楽活動における職業リハビリテーションの意義と可能性の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 音楽を通じた初期発達と自己肯定感の醸成

2（1）ピアノの手ほどき（小学1年生～）

- ・教師との連弾形式の教材を用いることで、
本人は簡単な音を弾くだけで豊かな音楽体験を享受できた。

- ・このポジティブな学習体験は、
音楽と協働作業への興味・関心・意欲を高め、
達成感、自己効力感、継続的な学習意欲、
他者への信頼感や感受性を育む基盤となった。

2（2）即興演奏遊び（小学2年生～）

- ・即興演奏は、本人と父親との間で「音と言葉のキャッチボール」として始まった。

本人が自由に音を鳴らし、父親がその音から浮かんだイメージを言葉で伝え返すことで、イメージの言語化を苦手とする本人と父親の間に豊かな音楽世界が創造されていった。

- ・この活動は、練習や指導のない「安心できる本番」の連続であり、常に自己表現が受容される環境を提供した。その結果、本人は緊張することなく集中して伸び伸びと演奏し交流する姿勢を身につけた。この姿勢は音楽活動に留まらず日常生活にも影響を与え、非認知能力が内発的な動機付けと自己表現の喜びを通じて育まれた。これらが将来的な演奏活動の基盤となり、『天職』（特に生きがいと自己実現の側面）へと繋がった。

2（3）鑑賞活動を通じた自己選択能力の育成 （小学3年生～）

- ・ 鑑賞活動は、父親が選んだCDと一緒に聴き、多様なコンサートに親子で参加することから始まった。
- ・ 音楽をどのように表現し、共有し、心を動かすかを無意識に体験した。
- ・ 音楽映画鑑賞により「人と音楽の関わり」への認識・理解を深めた。
- ・ 最終的には鑑賞する音楽や映像を本人が自ら選択するようになり、多様な興味・関心、社会性、適応能力、そして自己選択・自己決定能力が育まれた。

3. 社会的交流と専門性向上のための活動

3（1）セッション参加と演奏交流（中学2年生～）

- ・ 様々な音楽ジャンルのセッションに参加する中でアンサンブルの楽しさや、多様な人との交流を経験した。
- ・ 美術・演劇などとのジャンルを越えたコラボレーションや地域を越えた全国的活動は、高校卒業後、ニュージーランド単身ワーキングホリデー中のストリート演奏や現地イベント出演にまで広がった。
- ・ オリジナリティ溢れるピアノ即興演奏は、見知らぬ土地（海外）での長期滞在交流の大きな支えとなった。

3（2）全人的アプローチによる人間力の醸成 （小学5年生～）

- ・ 剣道やフットサルは、体力や集中力だけでなく、チームワークやレジリエンスを育み、これらが音楽のダイナミズム、他者との協調、困難な状況でのパフォーマンス維持に繋がった。
- ・ 多様な場で役割を担うことで、演奏活動は『天職』として社会とつながる手段となった。
- ・ 以上の「全人的アプローチ」による「総合的職業準備」により、共働力や人間力といった音楽活動全体の土台となる能力が培われた。

3（3）専門的な音楽学習（小学6年生～）

・進学以前の活動により興味・関心・意欲・態度が育っていたため、高校進学後の厳しいレッスンにも意欲的に取り組み、高い学習意欲、困難への適応力、多様な学習方法への対応力、協調性が育まれた。

・以上により、これまでの活動で培われた基礎能力が、より専門的かつ実用的なスキルへと発展し、『天職』の基盤となった。

4. 職業的アイデンティティの確立とキャリア形成

4（1）父子共演を通じた実践的職業能力の向上 （中学3年生～）

- ・父子共演を、被災地を含む様々な場で行った。
 - ・その中でも特に「葉っぱのフレディ（朗読とピアノ）」を生涯にわたる活動演目と位置づけた。
- 朗読とピアノを重ねず交互に演じることでピアノの自由度を確保し、後に本人が朗読と演奏の両方を担当することも可能にした。
- ・この物語から「父が亡くなっても独りではない。いのちは永遠につながっている」と本人が実感することを願っている。
 - ・これらの活動は、これまでの個別の成長を集大成し、共働・共生の実践的な職業能力と職業人生観、社会貢献意識を育む機会となった。

4（2）プロフェッショナル基盤の構築（高校2年生～）

スモールステップを積み重ねることで、
リサイタルを定期的に行うようになった（現時点30回）。

- ・ 多様な演奏を様々な場で楽しむ経験を重ねた。
- ・ リサイタルを定期的に行うようになった。
- ・ 初回は即興ソロ演奏とバンド演奏の二部構成だった。
- ・ 回を重ねる毎に本人が選曲やMCも担当するようになった。
- ・ ソロリサイタルもできるようになった。

これまでの音楽活動で培われた能力を総合的に活用し、
プロフェッショナルとしての基盤を築いた。

4（3）作品制作を通じた自己再構築と 職業的アイデンティティの確立（23歳～）

- ・レコーディング／CD制作を開始した。
- ・即興演奏は本人の主体的世界であり、
他者からの指導やアドバイスを必要としない。
- ・この活動は、二次障がいパニック発症による
精神的な危機からの回復を目指す自己再構築の過程で、
創造性、プロフェッショナル意識、目標達成能力、
そして自己の生き様を表現する職業的アイデンティティを
確立するために重要な役割を果たした。
- ・回復してからではなく、
「回復途上にあっても、音楽と心は深まる」
ことを実感して支援を続けている（現時点で4作品を発表）。

4（4）ピアノカフェとインターネット配信による 持続可能なキャリア形成（28歳～）

- ・「自分のピアノカフェを開きたい」という本人の夢を実現した。
但しこれは、本人の夢を深掘りし、健康状態と生活状況を考慮した結果、一般的なカフェ営業ではなく、プライベートスタジオとして友人との交流や演奏を行う場となった。
- ・父親の「自由にピアノカフェを続けるためにも、今こそ働こう」という言葉が本人を後押しして就職を実現した。
- ・現在では定職を持ちながらカフェからピアノ演奏をインターネット配信し、将来的にはグローバルな交流を目指している。
- ・この活動は、これまでの経験を統合し、自身の夢を起点に現実的な状況と摺り合わせながら就労を実現し、さらにデジタル技術を活用して自己表現と社会参加の場をグローバルに拡大していく、持続可能なキャリア形成の新たな形を創出している。

5. 論文の結び

- ・本報告で示したプロセスは、当初から計画されたものではない。
「生きづらさを抱えるわが子を、音楽の力で幸せにしたい。一緒に幸せになりたい」という父親の強い思いが、都度の選択と積み重ねを生み出した。
- ・その中で、本人のピアノ即興表現が聴く人の心に「働きかけ」、その価値が徐々に明らかになるにつれて活動が広がり、対価や報酬が発生した。「仕事の価値は相手が決めるもの（もしくは相手の事情による。かつ報酬は金銭に限らない）」という考えのもと、無料から有料までご縁に応じて活動が続けている。
- ・より高次の普遍的な目標である「幸せにしたい、一緒に幸せになりたい」という共働・共生・ウェルビーイングの追求が、多様で継続的な活動を生み出した結果として、音楽が本人の『天職』となった。
- ・共働・共生・ウェルビーイングを目指すことが、知的障がいのある人の持続可能なキャリア形成と豊かな社会参加を実現するための鍵となることを実証した。

6. 以上の活動の“環境的側面”について（論文の補足）

●本人の力を高める三位一体支援の必要性

（働く広場2025年1月号、松為信雄氏）

- ・ 本人
- ・ 支援機関／家族
- ・ 企業関係者

＜社会（本報告の活動で重視した）＞

●協調的自己創出

人は周囲との関係性（環境）の中で育つ

●長年の活動を通じて意識したこと

- ・ 「音楽を通じた出会いと交流の日々を生きる息子の物語」
の実践
- ・ 「たくさんの人の中で育てる」

●キーフレーズ（アフリカのある地域の言い伝え）

「1人の子どもを育てるには、村中の人の力が必要だ」

本実践を通じて多様な人々との関わりや環境が力になった。

- ・最適な導入教材を与えたピアノ教師
- ・音楽鑑賞活動の充実に適した地域
- ・仲間（音楽セッション、剣道、フットサル）
- ・個性を尊重し活かす教育（音楽専門学校高校科）
- ・演奏活動サポーター
（リサイタル、レコーディング、演奏依頼）
- ・支える社会の存在
（日本／ニュージーランドでの一人旅）
- ・ドリームサポーター
（演奏活動、ピアノカフェ、運転免許、就職）
- ・継続支援（医療・福祉・雇用）

以上、全ての関係者と環境に感謝！

本報告の「物語版」

出版：Amazon/Kindle

●推薦文 by ChatGPT

「この本は“支援”の常識を優しく問い直してくれる。音楽という自由な表現を通じて、人がいかに育ち、自立していくか。支援者として、親として、私たちが何をすべきかを教えてくれる、まさに現代の“物語療法”の記録だ。」

●短縮版書評 by ChatGPT

本書は、知的障がいとパニック症を抱える息子と、彼を支える父の20年にわたる音楽と人生の記録である。「ピアノを弾いて暮らしたい」という息子の夢に、父は「そうか、じゃあそうしよう」と応え、ゆういちの才能と心を、即興演奏という自由な表現の場で丁寧に育てていく。音楽活動を通じて出会った人々との交流、屋久島や被災地での活動、ニュージーランドへの挑戦は、まさに「物語を生きる」力を証明している。支援・教育・福祉の枠を越え、「あきらめなかった夢」のあり方を問いかける一冊。



佐々木浩則

神さまになった母に見守られ、
音楽を通じた出会いと交流の日々を生きる息子の物語

あきらめない限り必ず夢はかなう
たとえ夢のかたちは変わっても